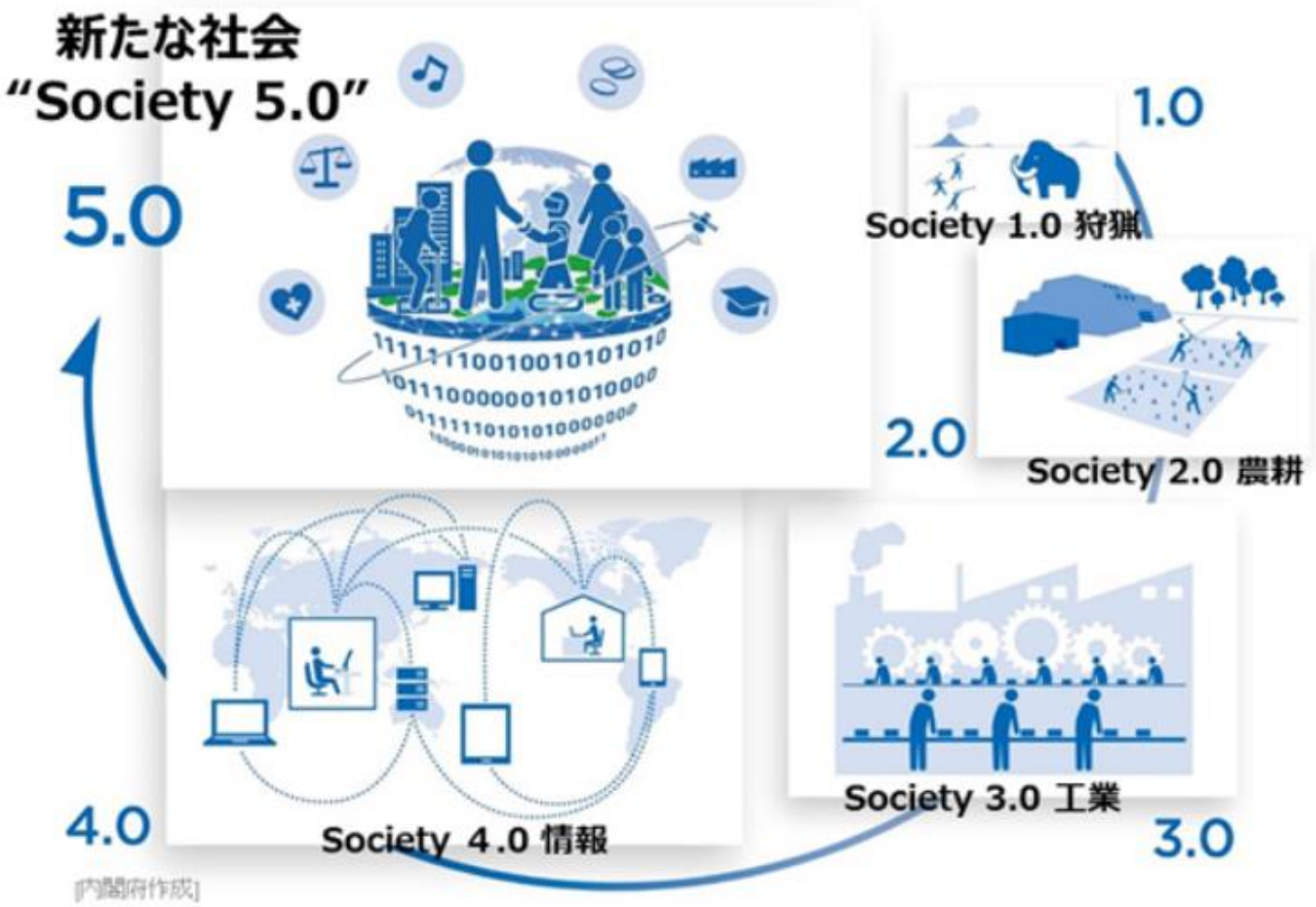
人類の進化から考える保育～共同保育の力～

●「Society5.0」というものをご存知でしょうか。これは内閣府が提唱する科学技術政策の略称であり、内閣府のホームページでも「わが国が目指すべき未来社会の姿」と紹介されています。「5.0」という名から察しがつくようにそれ以前の社会を狩猟社会（Society 1.0）、農耕社会（Society 2.0）、工業社会（Society 3.0）、情報社会（Society 4.0）と位置づけ、これに続く新たな社会が Society5.0 というわけです。



●その内容は、「サイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会」だそうです。要するに『スマートでウェルビーイングな人間中心の社会』ということですが、この「人間中心」とは、「人間主体」すなわち「人間があらゆる責任の主体となる」という意味だと理解できます。これまでどちらかと言えば科学・工学といった認知的な側面を磨くことに偏りがちだった人類社会の進化プロセスを振り返り、今一度「人間にとって万古不易の幸福とは何か」という本質に立ち戻ろうという政策担当者のメッセージが感じ取れます。

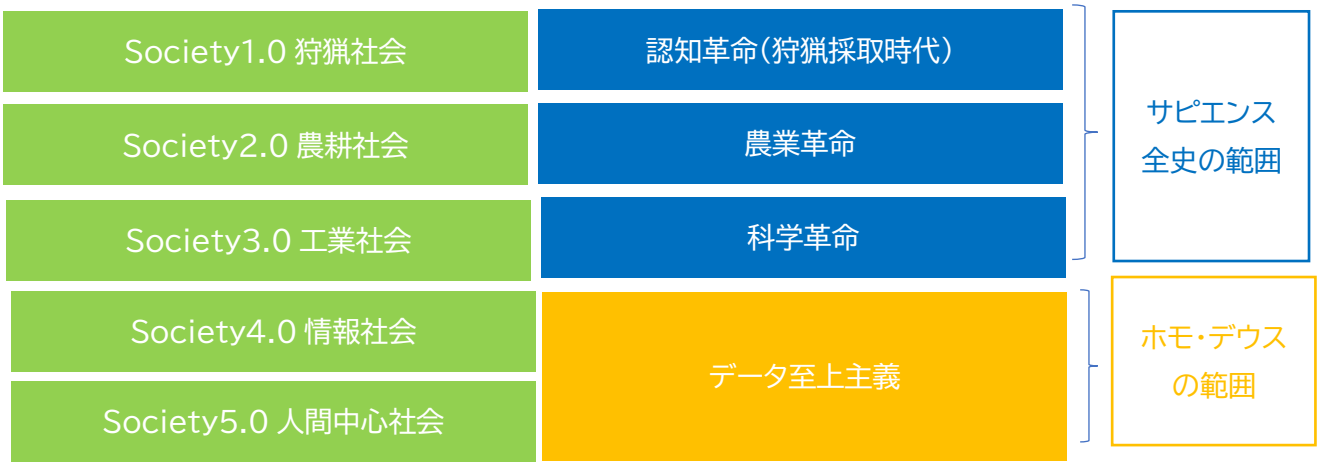
●このような人類の進化プロセスで思い出したのが、今から10年以上前にイスラエルで発行され、いまだに世界的なベストセラーとなっているユヴァル・ノア・ハラリ著「サピエンス全史」（河出書房）です。



●当時その分厚さから（それも上下巻…）途中で読むことを挫折していた本書でしたが、前回ご紹介した藤森平司著「保育の起源」（世界文化社）の中にある、『人類の進化から考える保育』の章を読んで以来、Society1.0、すなわち狩猟採取社会以前の人類の育ちに関する興味が高まり、再び本書を手に取ることにしました。そこで今回は、「サピエンス全史」「保育の起源」両書籍の中から、**人類が過酷な生存環境の下でどのような進化の過程を経て生き残り、やがて食物連鎖の頂点にまで達し、急速に勢力を広げていったのか。そして、その中で子育て（保育）がどのように行われてきたか**について、紙面の都合上結論だけギュッと凝縮して紹介させていただきたいと思います。

●いきなり結論に入る前に、本書を読んで個人的に興味深かった点を 2 点先に紹介します。

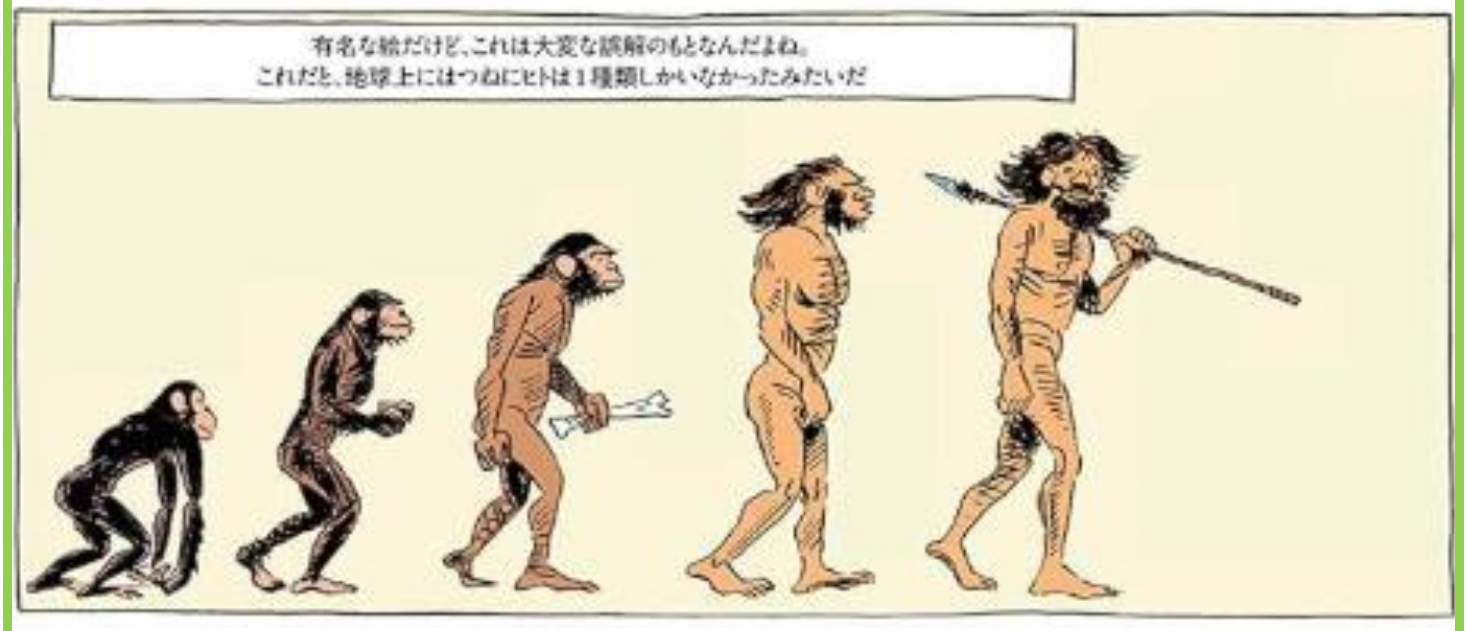
●まず初めに面白いと感じたのは、内閣府の「Society1.0～5.0」の各カテゴリと、ハラリ氏が提唱するホモ・サピエンスが進化の過程で経験し、また未来に経験するであろう革命のカテゴリとの共通性です。次の図をみてください。



●実は「サピエンス全史」には「ホモ・デウス」という続編というべき著書があります。サピエンス全史では過去から現代までの人類史を取り扱っているのに対し、ホモ・デウスでは人類史の未来予測を扱っています。この両者を合わせたとき、描かれている内容はさておき、前述のsociety1.0～5.0までのカテゴリとの一致が見られます。

●ちなみに「サピエンス全史」の中では、ホモ・サピエンスが急速に進化成長を遂げた理由として約 7 万年前に「認知革命」、約 1 万 2000 年前に「農業革命」、そして 500 年前に「科学革命」以上3つの革命を経験してきたことを掲げています。この点については後ほど触れます。

●また、本書を読み私の中での誤解を発見し興味深かったのが、同書の漫画版に書かれている次のイラストです。

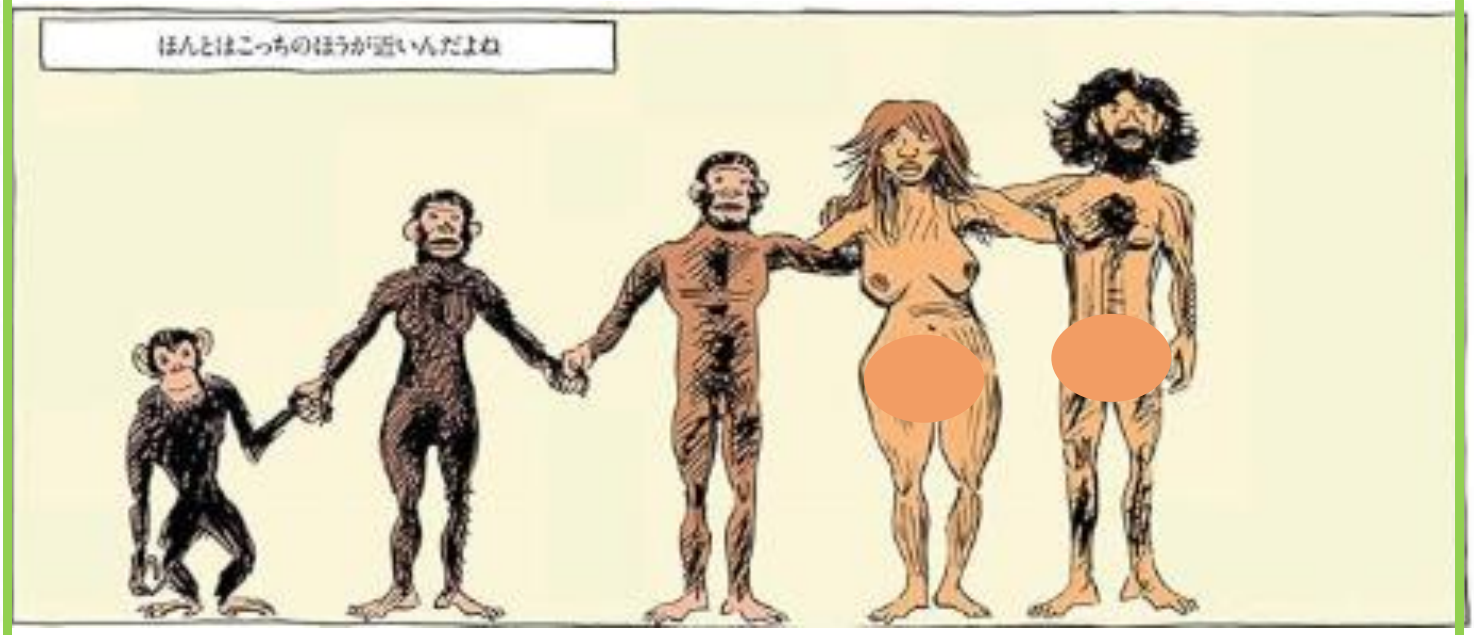


（引用元：漫画『サピエンス全史』 ユヴァル・ノア・ハラリ著　河出書房）

●誰しも歴史の教科書などで一度は見たことのある、いわゆる「サルからヒトへ」の進化プロセスの図ですよね。

●私もこの漫画内のキャプションにあるとおり、人類は長い年月をかけてサルからヒトへ一歩ずつ姿形を変化させていった（常にヒトは１種類しかいない）のだと誤解していました。

●ところが事実はそうではなく、それぞれの種族は誕生の時からさほど姿形を変えずに同じ時代に生きていたこと。そして、その他の人類（ホモ属）は軒並み滅ぶ中で唯一生き残ったのが、私たちホモ・サピエンスだと言うのです。この説には驚きと同時に、妙にしっくり来ました。なぜなら私たち人間が徐々に猿から姿形を変えてきたとするならば、なぜ今もなお、猿やチンパンジーがそのままの姿で存在し続けているのか、私の中での長年の疑問だったからです。



（引用元：漫画『サピエンス全史』 ユヴァル・ノア・ハラリ著　河出書房）

●さて、本題の話を進めます。「保育の起源」「サピエンス全史」いずれにも共通して論じられている、私たちの遠い祖先が気候変動や急速な環境変化という過酷な生存環境の下で生き残り戦略として最初に選択した重要なものは何なのか。結論を言うと、それは**「直立二足歩行」**であると私は理解しました。

●なぜなら、まだ肉食動物の餌食になるリスクを孕みながら狩猟採取を続ける中で、予期せぬ食物資源に出会った際、両手が使えれば**一度により多くの食物を運搬**することができたからです。また、両手が使えることで、手指の神経や筋肉が高度に発達し、**道具を巧みに使える**ようになりました。さらに直立することで、**脳を大きくすることが可能**になりました。

●しかし直立二足歩行にはデメリットもあります。それは四足歩行の時に比べて**足が遅くなってしまい、多くの肉食動物の餌食に**なりやすくなるという点です。また直立姿勢によって**骨盤が狭くなり**、産道の大きさも制限されてしまうため、**大きな頭の子は産めない**ということも生じました。

●そこで人類は、胎児の状態で赤ちゃんを産み、出生後に速いスピードで脳を成長させることを選択しました。要するに、さまざまなデメリットはありながらも直立二足歩行を行うことで、最終的には**小さく産んで「大きな脳」を育てること**を生物生き残り戦略の切り札として選んだと言えます。

●もちろん赤ちゃん段階では当然手がかかり、大切に育てる必要があります。他方、出産適齢期の女性は社会を維持する働き手としても重要な存在でした。また乳幼児が肉食動物の餌食になりやすい当時のリスクを考えれば、できるだけ短期間に多くの赤ちゃんを産まなければと考えたはずです。そこで人類は**毎年出産する**という方法を選びます。離乳を早め、母親以外の者が道具や火を使うことで離乳食を作り、育児を行う必要があったのです。「保育の起源」から以下引用します。

〇赤ちゃんを母親だけで育てず、近くにいるみんなが手伝う。赤ちゃんは生まれてすぐに家族の手にゆだねられて、家族みんなに育てられる。他の動物と違い、なぜ人類だけがこのように進化してきたのかという長い間考えられてきた問いへの答えの一つが「共同保育」という形にあることが、最新の類人猿研究によって明らかになってきています。私たちの祖先は、両親、祖父母、おじ、おば、きょうだい…。家族みんなで育児をしてきました。(「保育の起源」藤森平司著　世界文化社)

●核家族化が進んだ現代社会では、まさにこの共同保育の役割を私たち保育者が担っています。「赤ちゃんの頃から他の人(保育園)に預けるなんて可哀そう。」だったり、「せめて赤ちゃんの頃は母親がつきっきりで育児すべきでは？」などという考えは、長い人類の歴史を振り返っても存在しないのです。保護者の皆様にはぜひ安心して、保育園にお子様を預けていただきたいのです。

●それに、「大人も乳幼児も、共同保育の中でしか学べないことがある」と、藤森氏は言います。再び保育の起源を引用します。

〇一緒に子育てをする最小単位としての家族が次第に集まり、もう少し大きな集団である「ムラ」が形成されていきました。小さな社会の実現です。このように、家族、そしてムラ＝社会で共同保育をしていく中で、人類はコミュニケーション能力を持つようになり、赤ちゃん自身も社会の一員となるための「社会脳」をおのずから育んでいき、その中で「共感力」や「感情をコントロールする力」、「自己抑制力」などの「非認

知能力」を身に付けていったと考えられます。乳児保育の大切さは、人類の始原にルーツを持っていたのです。



（引用元：漫画『サピエンス全史』 ユヴァル・ノア・ハラリ著　河出書房）

●人類が共同保育によって獲得した社会脳や非認知能力も、おそらくは人類が戦略的に獲得した「大きな脳」あってのものなのでしょう。仲間で社会を形成し、助け合うことは、頭脳が大きくなければ実現しません。**一人ひとりは弱者だった私たちの祖先は「直立二足歩行」「大きな脳」「非認知能力」を武器に互いに助け合うことで、過酷な環境を生き延びてきた。**どうやらこれが、冒頭で掲げた問いに対する答えのように思います。

●ところが、「サピエンス全史」によれば、そんな人類（ヒト属）の間でも約 3 万年前にはネアン・デルタ―ル人が絶滅し、私たちの祖先であるホモ・サピエンスが唯一のヒトとなりました。そしてこの明暗を分けた最大の原因となったものが、約７万

年前にホモ・サピエンスにだけ発生した「**認知革命**」なのだそうです。認知革命によって、ホモ・サピエンスはそれまで以上に多くの個人や家族や集団を不思議な絆で結び付けることが可能となり、認知革命こそがその後に起こった「農業革命」「工業革命」を牽引した最大の力であると、ハラリ氏は述べています。

●そうすると、この認知革命について詳しく理解することで、現代の保育に活用できることがあるのではないかと夢が膨らんでいきますが、それについては次号でお伝えします。

園長　橋本　英明

